

Newsletter

May 2020

<http://www.aack.info>

目次

59年振りの劔岳

松井千秋1

「初めて」に恵まれた

私のヒマラヤ・チベットと南極

上田 豊8

2020年度総会について

京都大学学士山岳会会長

幸島司郎16

会員動向16

編集後記16

59年振りの劔岳

松井千秋

はじめに

昨年7月、1960年春の「十字峡横断」から59年振りに、その時の下山路に使った早月尾根から劔岳に登った。頂上からは鹿島槍ヶ岳、黒部別山、立山へと続く黒部十字峡横断のルートを確認し、劔岳夏山合宿で登った、源次郎尾根、ハツ峰、劔尾根などを眺めた。1957年の入学以後、今日まで山や自然を楽しむことができたのは、山岳部に入って登山の基礎を学び、山の仲間との交流が続いていることによる。京都大学時代（11年）、九州大学時代（33年）、定年退職以後（19年）の63年間の山や旅について回想する。

1. 京都大学時代

山岳部入部

子供の頃から自然の中で遊ぶのが好きで、中学・高校時代の夏休みには、家の近くの瀬戸内の海に行き、泳いだり、潜って魚を突いたりした。浪人の1年は広島山の山や谷を歩いた。大学に入る前年の1956年にマナスルが初登攀された。その記録映画と登攀者の広島での講演に刺激されて、山岳部に入った。入部時のリーダー(L)は松浦さんで、まず先輩達から金毘羅山、道場で、ザイルの使い方、アップザイレンや確保の方法など岩登りの基礎訓練を受けた。

最初の劔岳夏山合宿(L竹内)では、ピッケルを使ってのグリセードや転倒・滑落時の止め方などの雪上訓練を受けた。その後、各パーティに分かれて、岩場の登攀に入った。2回生の松尾さんとOBの谷さんと登った、「チンネ中央チムニー・Aバンド・Bクラック」が忘れられない。登攀中、背後の空間で雷が頻繁に発生していたことを、登り終わってから聞いた。岩場に集中して余裕が無く、全く気が付かなかった。真砂沢のキャンプ地から、雪溪を經由してのチンネの登攀が、新入生に対する3か月の訓練で可能になったことは、今考えても素晴らしいことに思える。新人教育体制がしっかりしていたのだろう。合宿の後、山県、原田(浩)、1回生3人で10日間かけ、劔岳から立山連峰、五色ヶ原、平を経て、針ノ木峠に上がり鹿島槍ヶ岳、五竜岳、白馬岳を縦走し、雪倉岳から小川温泉に下って夏山を終えた。

秋山は10月に、上尾(L)さん、同輩の小浜・山県・福本・脇野と潤沢に入り、前穂高岳北尾根、奥穂高岳、北穂高岳に登った。帰路は上高地から徳本峠を越えて島々に下った。11月には、先輩の土井(L)・南条・笠原さんと鎌尾根から鹿島槍ヶ岳に登った。鎌尾根の登攀中に、偶然、吊尾根を南峰から北峰に走るカモシカの姿を見た。幻覚かと思ったが、稜線に上

がると雪面に確かに足跡が残っていた。冬山は笹ヶ峰ヒュッテでの合宿で、初めてスキーを履き、山スキーの基本を習った。春山は3月、立山東面の中央山稜の初登攀を目標に、沖津（L）さんと上尾さんの3人で、弥陀ヶ原を通り、一の越から御山谷をスキーで黒部川まで下って御山谷小屋に入った。降雪が続き目標は達成できなかったが、山行の前半に2681m尾根から雄山には登った。この山行で、上尾さんと2人でルート偵察中に、足元の雪面が突然水平に切れて、黒部川に向かって落下していく、雪崩発生の貴重な瞬間を経験した。

2・3回生の時も同じように1年を通して山に行き、年間100日は山に入っていたように思う。以下の山行が印象に残っている。2回生の時、穂高の夏山合宿（L前小屋）の後、奥又白池の傍にテントを張って、前小屋さん、山口・松井・丹波、それにOBの松田さんも参加されて、前穂高岳の東壁、北壁、北尾根4峰などを登った。4峰新村ルートでは、オーバーハングで難儀し、トップを変わって山口が簡単に越えて行ったことを覚えている。この山行の時、前穂高東壁で不思議な小動物の群れが、岩の上を流れるように移動する光景を目にした。その珍しい動物は、後で「オコジョ」と知った。奥又白の岩登りの後は、山口、丹波と3人で、大槍と小槍に登り、双六岳、雲ノ平、薬師岳と縦走して、平から針ノ木峠に出て大町に下った。秋山は、山口・山県らと北岳バットレスを目指したが、天候が悪く岩場にも取り付かなかった。しかし、別ルートで北岳には登った。

2回生の冬山は、1回生の春山で登れなかった立山中央山稜を目標に、当時貫通したばかりの関電トンネルを、民間人として初めてジープで通してもらって、立山東面に入った。OBの潮崎（L）・谷さん、3回生の上尾・白井・高橋さんと松井が参加し、ベースからキャンプを2つ伸ばして、潮崎・上尾さんが初登攀した。第2登のメンバーに選ばれたが、天候悪化で撤収になったのは残念だった。春山は、「黒部源流の山と谷」をめぐる大規模な合宿（L酒井）で、OBの岩坪さんのパーティに加わって薬師岳に登り、藪内OB・安田と3人で笠ヶ岳、酒井OB・小浜・小沢らと槍ヶ岳に登った。

3回生の時も、剣岳夏山合宿（L前小屋）の後、三ノ窓コルにテントを張って岩登り合宿を

した。前小屋・山口・脇野・松井・野村（悦）・松田OBが参加し、チンネ左稜線、池ノ谷右俣奥壁、中央ルンゼ、剣尾根を登った。ある朝、三ノ窓のコルから、剣尾根の稜線をクマが歩いているのを目撃した。森の動物が、なぜ3000m近い岩場で行動するのか不思議だった。冬山は、笠原さんをリーダーに総勢9名で穂高小屋に入った。松尾・原田（道）・松井のパーティは前穂高北尾根に登り、3峰の頂上近くでビバークしたが、1960年元旦に前穂高頂上に立ち、吊尾根をへて奥穂高に登頂した。

黒部十字峡横断

1960年の3回生の時の春山は、「黒部中流合宿」（L谷口）と「十字峡横断」（L塩瀬）の2つが計画された。その概要は、酒井（尚）が「2019年春、京都で回想の集い」（AACKニュースレターNo.90、2019.4）に述べている。「十字峡横断」のメンバーは、本隊の塩瀬・原田（道）・松井・安田・田村・笠目・田中（二）の7名とサポート隊の原田（浩）・三島・田中（健）の3名計10名である。コースは、赤岩尾根から後立山連峰の稜線に上がり、鹿島槍ヶ岳南峰から牛首尾根を下って十字峡を横断し、黒部別山に登って立山連峰へ、そして剣岳に登頂して早月尾根を下山する、という23日間の大きな山行であった。その詳細は、田中（二）が「十字峡横断を回顧する」（前記のニュースレターNo.90）に書いている。ここでは個人的な感想を述べる。出発前、「十字峡」と「黒部別山北尾根」については、前年夏の2つの偵察隊が台風来襲などで共に十字峡に到達できなく、その状況が不明でかなり不安であった。しかし、その実情は、黒部川本流には関電の工事要員用の小さな吊り橋があり、北尾根は不安定な急傾斜の雪稜ではあるが、特に難しい岩場はなかった。全コースにわたって、山岳部3年間に経験した以上の技術的な難所は無く、雪崩への注意と重い荷物の荷揚げが最重要事項であった。この山行の成功は、リーダーシップとフォロアーシップが良くかみ合い、本隊とサポート隊の10名がそれぞれの実力を発揮したこと、天候が割合良かったこと、によると思う（写真1）。そして、感謝すべきことは、先輩たちが見出した大きな目標を、後輩の我々が引き継いだことである。

十字峡横断の「横断」は、人工物の吊り橋に



写真1 十字峡に向け牛首尾根を下る
撮影 安田 1960.3

よって成功したが、本流にワイヤーしか架かっていない場合を想定し、隊は滑車を持参していた。もしワイヤーも無かった場合、太古からの黒部川を渡ることになり、このコースの初トレースとしては最も理想的な状況であったかもしれない。このことはその後、ずっと私の頭から離れなかった(松井「十字峡横断に思う」『黒部別山一積雪期一』黒部の衆 三水社 2005.3)。昨年(1960)の3月に昔の仲間が京都に集まった時に、このことを塩瀬に話した。2次会の席だったので具体的な話にはならなかったが、塩瀬は「考えていた」と云った。最初に黒部渓谷に到達したとき、原田(道)は川に降りて流れに手を入れ、「暖かい」と言った。水量は相当減水していたので、渡渉も可能だったかもしれない。メンバーの内3人は、専門が土木・建築で、すでに構造力学を学び始めていたから、流木を探して利用するなど、何か渡る方法を考え出したかも知れない。

十字峡横断以後

早月尾根から下山して春の京都に帰り、大学に行くとき、掲示板に主任教授からの呼出しが掛かっていた。教授室に行くとき、4回生からの卒業論文着手への意志を聞かれた。取得単位数が少ないので、心配されていたらしい。このこと

は山で充分考えていたので、留年して学習の遅れを取り戻したいことを伝えた。すると、教授は「実は私も留年したのだ」と言われた。励ましの言葉のように受け止めた。4回生での山の活動は減り、主な山行は11月の明神岳東陵から西穂高への縦走と、12・1月の西穂高から奥穂高への登攀、のみである。5回生になり、東大から来られた建築構造学の若林實先生の研究室で卒業論文を書き、更に大学院の修士課程に進学した。大学院修了後、建築学科と防災研究所で4年間助手を務めた。1962年4・5月、OBとして参加した明神岳最南峰から明神、前穂、奥穂、北穂への縦走が、山岳部最後の山行になった。

2. 九州大学時代

1968年4月に九州大学建築学科に赴任した。この年は大変な年であった。九大着任早々の5月に十勝沖地震が起り、多くの建築物が崩壊・倒壊した。その調査から帰ってくると、6月に建築学科に隣接して建設中の7階建ての電子計算機センターに、米軍のファントム戦闘機が墜落した。その機体の引き下ろしと、米軍への引き渡しの問題をきっかけに、大学と学生が対立し紛争が起こった。米軍板付基地撤去を求める教職員のデモや学生の授業ボイコットなど、教育・研究の場は異常な状態が数年続いた。

九州の山

九州の山は、1969年の秋、建築学科の2つの構造系講座(鉄骨構造、鉄筋コンクリート構造)の教職員・学生が参加する、合同ゼミが九重高原の九大研修所であった時に、近くの黒岩山(1503m)に希望者を募って登ったのが最初であった。その後、研究室の学生、家族、「山の会」(後述)などの仲間と登ったが、各地で会議や研究会があった折に1人で登ることが多かった。深田久弥の『日本百名山』(新潮社1964.7)には、九州に6座(九重山、祖母山、阿蘇山、霧島山、開聞岳、宮之浦岳)がある。それ以外で、これまでに登った印象に残る山を10座挙げると、雷山、宝満山、英彦山、由布岳、黒岳、大船山、傾山、国見岳、市房山、大崩山、である。九州は人工林が多くて自然林は少ないが、これらの山には自然が残り、山の姿も個性的である。

福岡県の東西に伸びる背振山系の雷山（955 m）は、自宅から車で20分のところにあり、大きな登山の前には必ずトレーニングに行く。標高400mにある雷神社の境内には、県の天然記念物の樹齢1000年ほどの2本のスギやイチョウ、モミジ、モミなどの巨木があり、頂上近くにはブナの自然林もある。中腹には古代の山城の跡と言われる「神籠石」がある。山の南の佐賀県側には「吉野ヶ里遺跡」があり、北の福岡側は『魏志倭人伝』に書かれた「伊都国」の領域で、古代から人々に眺められてきた糸島地方の名山である。

九州以外の山では、1969年の夏、建築学会の札幌大会の折に学生とテント持参で大雪山旭岳から黒岳に縦走した。それ以外の大きな山は、各種の会議の機会に1人で登った、利尻山、山上ヶ岳、甲斐駒ヶ岳、仙丈ヶ岳、氷ノ山、磐梯山、だけである。

マッターホルン

1973年7月にイタリアのローマで第4回世界地震工学会議が開催され、京大若林研究室の時の研究仲間4人と参加した。助手の時の研究成果を発表した後、スイスの大学を訪問した。そこで皆と別れて、マッターホルン（4477m）に登るため、一人でツェルマットに行った。ガイド事務所に行って登山の申込をすると、これまでの山歴を聞かれた。日本で岩登りや雪山に登った経験を伝えると、問題なく引き受けてもらえた。標高1600mのツェルマットからケーブルと徒歩で標高3200mのヘルンリ小屋に行き、7月12日午前3時に出発して標高差1200mを4時間20分で登頂した。頂上では雪が降っていた。下山も登りと同じ4時間20分だった。正午前、ヒュッテに戻ってくると、デッキで我々の下降を見ていた人達から拍手で迎えられた。海外の山は初めてだったが、剣や穂高の岩場を登っていた経験から、ヘルンリ稜の岩場は特に難しい感じは無かった。ソルベイ小屋から上部の雪の急斜面は緊張したが、スイスのガイドは信頼でき安心して登れた。登りでの休憩は、ソルベイ小屋でのアイゼンの取り付け時の1回だけだった。福岡の山で、長時間歩くトレーニングを重ねていたので体力的な問題はなかった。登山の後にはまた仲間と合流して、オランダ、西ドイツ、イギリスの大学や研究所の施

設や実験などを見学し帰国した。この初の海外渡航では、ヨーロッパに40日間滞在し、実り多い旅になった。

エベレスト山麓

世界地震工学会議は、4年毎にオリンピック開催の年に地震国で開催される。第6回の会議は1977年1月にインドのニューデリーで開催され、日本の耐震構造の研究成果を発表した。会議後、一人でネパールに行き、カトマンズから小型飛行機で標高3400mのシャンボチェに行き、エベレスト山麓を9日間旅した。旅は日本の山の旅行社を通じて準備してもらい、空港ではシェルパのガイドに迎えられた。その夜はナムチェ・バザールの村長の家の仏間に泊めてもらった。次の日1月18日、シェルパ族のガイド、コック、キッチンボーイの3人と、3頭のヤクに食料やテントなどを積んで、エベレスト山麓の旅に出発した。1日の行動は半日ほどでゆっくりと歩き、氷結した溪流、樹林、冬の澄んだヒマラヤン・ブルーの空にそびえる岩と氷の峰々、そしてエベレストを眺めた（写真2）。

5日間歩いてクンプ氷河の末端にあるロブジェ（5000m）に着いた。この間、インドで辛い料理を食べすぎたせいか、下痢が続いて食欲が無く体力的に苦しくなって、ここで引き返すことにした。帰路、パンボジェの僧院で、「雪男の頭皮」を拝観させてもらった。人間の頭部と違って先が少し尖っていた。ガイドは雪男の存在を信じていて、「ヤクの放牧場などで、イエティ・ソングを聞いた人は多い」と言った。ある夜、遠くから獣の吠える声をテントの中で聞いた。次の朝、ガイドに尋ねると、それはオ



写真2 エベレストとローツェ 松井 1977.1

オカミで「毎年、ヤク 30～40 頭が襲われる」とのことであった。この旅は、目標のカラパタールまで行けなかったが、道中、出会ったのはオーストリア人のグループだけで、初見参のヒマラヤの大自然を静かに味わった。なお、人間 4 名・ヤク 3 頭の旅の費用は 1 日 25 ドル（約 7500 円）で、大変安いと思った。

カトマンズに戻って、盆地周辺にあるレンガ壁と木による重層の民家や多層の仏塔などを見て回った。1934 年の地震（M8.3、死者 10.2 千人）で被害を受けた建物がまだ残っていた。カトマンズからカルカッタを経由し、20 日間の旅を終えて帰国した。

海外の山

1981 年 10 月から 10 ケ月、文部省在外研究員として、私の専門の鉄骨構造の実験や理論で成果を挙げている、米国リーハイ大学と英国ケンブリッジ大学に滞在した。リーハイ大学はペンシルベニア州ベスレヘム市にある。近くにアパラチア山脈が南北に通る、ここには世界最古で最長の自然歩道がある。10 月、大学の行事で紅葉のこの自然歩道にハイキングで行った。その後、2 度ほど 1 人で行き 50km ぐらい歩いた。次の年 1982 年 6 月に、イギリスに移る途中、カナダのウィスラー山（2464m）に登った。標高差 1200m ほど、歩く周囲は獣の気配が濃厚で少し怖かった。イギリス滞在中は、スコットランドにあるイギリス最高峰のベンネビス（1344m）に登った。その帰路、英国の国鉄がストに入り、帰るのに苦労した。7 月には、スイス連邦工科大学を訪問した後、ツェルマットに行った。ガイドと 2 人でモンテローザ（4634m）の標高差 1800m を 6 時間 50 分で登った。下山時、ガスが出て、氷河上のルートをガイドが一時見失ったが、無事にヒュッテに戻った。

1988 年 4 月、香港で高層建築の国際会議があり、研究成果を発表した。帰路は上海に寄り、リーハイ大学で同じ研究室だった同済大学の胡先生に再会し、日本の合成構造について講演した。その後、胡先生の手配で、上海から西に向かって 1 日中タクシーを走らせ、岩峰・雲海・奇松・温泉で有名な「黄山」に行き、蓮花峯（1867m、最高峰）、天都峯、光明頂に登った。当時、ケーブルカーの施設は無く、岩峰に刻ん

だ階段を登った。

研究室ゼミ旅行

1968 年の学園紛争中の夏、研究室で玄界灘の玄界島に行き、泳いだり、潜ったりして海で遊んだ。自然の中に入ると、教官も学生も人間的に対等になり、よく話げできた。これをきっかけに毎年、研究室のゼミ旅行は主に九州周辺の離島に行くことになった。最初の頃はテント・食料などを持参して自炊したが、そのうち人数が増えてきて民宿になった。ゼミ旅行は、大学院修士 1 年生が企画し、「遊び・食べ・飲む」の共同生活がゼミの内容だった。行先は、壱岐、対馬、五島列島、天草、種子島、屋久島など。島以外では、熊本の菊池渓谷、大分の耶馬渓、四国の四万十川に行った。香港島にも行き、優れた鉄骨構造として世界から高く評価されている「香港上海銀行」と「中国銀行」を見学し、この高層建築の独創的な構造の仕組みを勉強した。これが唯一の専門の勉強をしたゼミ旅行だった。2000 年夏の最後の研究室ゼミ旅行は、済州島に行き韓国の最高峰ハルラ山（1950m）に参加者全員 12 名で登頂した。

3. 定年退職以後

海外の山

2001 年 3 月、大学に 37 年間務めて 63 歳で定年退職し、その夏、久しぶりにアルプスを訪れた。ツェルマットに行き、マッターホルン、モンテローザを眺めながら、また海外の高山に登りたいと思うようになった（写真 3）。

2002 年 8 月、山岳ツアー会社の企画に参加



写真 3 マッターホルン 松井 2001.7

し、モンブラン（4808m）に登った。山岳部の後輩の田中（昌）と能田も参加した。田中とは1962年5月の明神最南峰から北穂への山行以来で、久しぶりにガイドと3人でザイルを組んだ。2003年8月、キリマンジャロ（5895m）とケニヤ山（4985m レナナピーク）に登った。2004年9月は、黒海とカスピ海の間にあるカフカス山脈のヨーロッパ最高峰エルブルース（5642m）に行ったが、積雪と強風で登頂できなかった。2005年7月、アララット（5123m）を強風の中、頂上を踏んだが、下山後過度の緊張と疲労から下血し、現地の大学病院に入院して治療を受けた。幸い1週間ぐらいで退院して帰国した。モンブラン登山から、順次山の高度と難度を上げて行けば、エベレストも可能ではないかと密かに思っていたが、アララット登山でとても無理なことが分かった。

2006年8月、中国ハルビンでの鋼・コンクリート合成構造の国際会議の後、会議の主催者の鐘先生の案内で長白山（白頭山）に行った。汽車とバスで麓まで行き、整備された山道を四輪駆動車で登って山頂直下に達し、少し歩いて稜線から、最深384mのイワナの棲む神秘的な「天池」を眺めた。この地は既に観光地になっていて、その日も多数の人達が訪れていたが、北朝鮮側の稜線には人影が無かった。

アララット登山の後、海外登山は止めたが、ニュージーランド、カナダ、アラスカ、ネパール、インド、ブータン、スウェーデン、ノルウェー、など各地の森林・湖・溪流・氷河・山岳などの自然を楽しみ、村・町・都市の生活や建造物などを見る旅は続けた。

東チベットの旅

2006年10月、久しぶりに山岳部の仲間と旅をした。雲南のシャングリラからラサまで10日間、チベット人の運転する日本製四輪駆動車4台で走り、走行距離は2100kmになった。メンバーは、同輩の笹谷（L）・原田（道）・福本、後輩の伊藤・田中（昌）、先輩の寺本さんの7名、それに途中の飛来寺から、現地調査を終えた京大医学隊の松林・奥宮・石根・木村さんら4名が合流した。明永村の梅里雪山遭難記念碑に参った後、昔の茶馬古道、川蔵南路を通り、いくつかの谷を遡って氷河に近づき未踏の山々を眺めた。旅で訪れた幾つかの山村の住居に、

日本の律令時代の穀倉と同じ3形式が使われていることを知った（松井「東チベット山村の住居」、AACK ニュースレター No.41、2007.4）。日本の校倉造の源流は、まだ分かっていないが、東チベット・雲南の可能性もあったと思った。

カナダのマス釣り

2009年7月に、笹谷（夫妻）・原田（道）・松井、後輩の野村（高）・島田とカナダ北部のカスバ湖にマス釣りに行った。湖岸にある釣り用のロッジと森を切り開いた滑走路以外、琵琶湖の面積の6倍ほどの大きな湖の周囲には、全く人工物の無い自然の中で、レイクトラウト、グレイリングをボートからルアーで釣った。釣った魚は、そのまま湖に戻すのがこの釣り場のルールだが、ガイドの許可を得て小振りな40～50cmのマスを何匹か確保し、湖畔での昼食時に刺身や天ぷらで味わった。ルアー釣りは、開高健の『フィッシュ・オン』（朝日新聞社1971年）を読んで初めて知った。九州の五家荘の溪流などで今も山女魚釣りをしているが、湖でマスを釣ったのは初めてであった。カスバ湖には1週間滞在して釣りに専念し、長さ90cm・重さ8kgの大物も釣れ、昔の仲間と至福の時を過ごした。

国内の山

九大現役の1983年頃、福岡の鉄構工業関係・建築構造関係・大学研究者らといろいろな会議などで親しくなり、自然発生的に「山の会」と称する自然と酒を楽しむ12～16名の会が生まれた。その活動は特に退職後に活発になり、それぞれの個人の趣味による企画で、対馬の船釣り、矢部川での鮎獲り、有明海の潮干狩り、四万十川のハヤ釣り、福岡近郊でのタケノコ掘り、など自然の中で遊んだ。登山は、九州が中心だが、大雪山旭岳、富士山、立山、白山、御嶽山、石鎚山にも登った。立山（2003年）では、みくりが池からの登りの山道で、ライチョウの親子4～5羽の群れに会い、立山三山を縦走して雷鳥沢の雪渓を下った。ライチョウも雪渓も、私以外の参加者7名には初めての経験だった。御嶽山登山（2014年）は、噴火の1月前の同じ時間ごろに噴火箇所近くを通ったが、仲間の1人はかすかな硫黄のにおいを感じていた。

定年後、京大建築学科の後輩が福岡で主宰している山の会の行事にも参加するようになった。この会の計画は常に山と温泉がセットになっており、楽しみが広がった。九州の山だけでなく東北の山、鳥海山、月山、岩木山、八甲田山、岩手山、早池峰山、八幡平、にも登った。

2017年10月、九州の最高峰の宮之浦岳に、海拔0mから登頂した。海亀の産卵で有名な「いなか浜」から永田歩道を通り、途中、鹿之沢の無人小屋に泊まり、永田岳を経て1936mの山頂に達した。2日間合計で19時間ほどかかり疲労困憊して、「二度と山には登りたくない」と思うほどであった。しかし、海岸から頂上までに出会った人間は1人、猿と鹿は多数、屋久島の自然の豊かさを感じた。海拔0mからの登山は、利尻島の鷺泊からの利尻山（1978年）、田子の浦からの富士山（2010年）をこれまでは単独で行ってきたが、傘寿を迎えての登山なので、用心して「山の会」の仲間3人に声をかけて一緒に登ってもらった。

59年振りの劔岳

傘寿の宮之浦岳登山で年齢的な衰えを実感し、次は記念になるような登山で締めくくりたいと考えるようになった。学生時代に最も親しんだ劔岳を選び、2019年7月に、「山の会」の友人と2人で登った。「十字峡横断」から59年振りである。その時の下山に使った早月尾根を、馬場島から標高差2240m、途中、早月小

屋に泊まり、2日間13時間で登頂した(写真4)。

この登山では、山岳部の時のように、ザックは軽量ではあったが「25分歩行・5分休憩」のピッチを維持して体力消耗を減らし、岩場の登降では「3点支持」で安全確保を意識した。福岡を出発した7月19日は、台風5号が九州に接近中で、梅雨もまだ明けてなく全国的に天気は良くなかった。しかし、7月21日の登頂日は曇ってはいたが視界は割合良く、頂上からは山岳部の時に登った、源次郎尾根、八ツ峰、劔尾根、「十字峡横断」の鹿島槍ヶ岳・黒部別山・立山の真砂尾根など主要コースが確認できた。能登半島、佐渡島、富士山も遠望した。早月尾根の登路では、残雪上にツキノワグマの足跡を見付けたり、霧の中でハイマツの下からライチョウが現れたり、雪の重みに耐えてきた立山杉の巨木を見たり、59年前の積雪期の下山時には分からなかった、原生林の自然豊かな尾根であることを知った(写真5)。

おわりに

これまで一緒に山や自然を楽しんできた、山岳部の昔の仲間、先輩・同輩・後輩、その後知り合った人達に深く感謝している。「無理せず、急がず、はみ出さず、力まず、ひがまず、いばらない」(比叡山延暦寺の千日回峰行を2度満行した酒井雄哉師の言葉、2013年87歳で没)を心に留めて、これからも自然を楽しみたいと思っている。



写真4 劔岳 2999m頂上 2019.7



写真5 早月尾根の立山杉 松井 2019.7

「初めて」に恵まれた 私のヒマラヤ・チベットと南極

上田 豊

1. 「初めて」の魅力

既登の8千メートル峰を巡る登山よりも、たとえ6千メートル峰であっても、未踏の登山の方がわたしには魅力だった。ヤルン・カンで逝った松田隆雄さんは、京大山岳部の部報に、こう書いている・・・私達は登山本来の喜び、最も容易なルートから新しい山に立つことにすべてを賭けている・・・

2019年は、ガネッシュ初登頂から55周年。その前年は、ヤルン・カン初登頂から45年。また2020年は南極「ドームふじ」に初到達してから35年になる。これらのほぼ10年毎に訪れた貴重な体験を振りかえることが、年をとるにつれ多くなった。

思い起せば、前記3つのこと以外にも、まだいくつかの初めての経験があった。それらの「初めて」をわたしは追い求めてきたようだが、一連の経験ができたのは、努力や能力とは違った、まさに運に恵まれたから、という面が大きかったと強く感じている。

ここでいう「初めて」は、いちおう、人間にとって初めて、という意味だ。それは世間一般には社会的な評価などにつながる場合もあるが、わたしは未踏の地に究極のロマンがあると感じ、ただそれを体験したくてやってきた。またその過程で、事を行う上でも、初めてであったので印象に残っていることもある。

すでにAACKニューズレターでは、ヤルン・カン登頂40周年記念特集で登頂後のわたしの40年を、またガネッシュ登頂50周年の特集で登頂後からヤルン・カンまでの二十代を振りかえった(文献1, 2)。合わせて、20才からの50年間を書いたことになる。

これらの既出文献と重なる所もあるが、初めてだったことを中心に、それに関わることを広く含めて成否によらず拾い集め、それらを向かった対象ごとにまとめてみたらどうだろうか。こうした見方から、ここで改めて自分の体験を振り返ってみようと思う。

2. ヒマラヤでの初めて

2.1 ガネッシュからブータンへ

最初の「初めて」の機会は、1964年京大山岳部のガネッシュ隊(樋口明生隊長)でおとずれた(文献3)。3回生だったこの年、折良く4月から海外渡航が自由化され、10月には東京オリンピックが開催された。

頂上アタックの前日、明日たどろうとする遙かな頂上への稜線を、わたしは見上げた。頂稜から吹き上がる雪煙が午後の陽を浴び、燃えあがる炎のようだった。そこには、登らんとする人間の行為なぞから超然として立つ山の姿があった。その姿にわたしは、山の本当の美しさがあると感じた。

吉野熙道・木村雅昭・上田の学部生による10月13日のアタックで、ガネッシュの中央峰(約7100m)を登頂(写真1)。翌々日、その南につづくガネッシュ最高点・アンナプルナ南峰(7219m)を上尾庄一郎・ミンマツェリン両氏が初登頂した。中央峰は、苦闘した登攀ルートを登り切ったゴールのような頂上で、ガネッシュは隊にとって、「初」の達成感を2つ恵ん



写真1 ガネッシュ中央峰頂上の吉野さん
(1964. 10. 13)



写真2 ガンチェンポ (1982. 9. 22)

でくれた珍しい山だった。

登頂後、学生4人は二手に分かれてネパールをトレッキングした。島田喜代男さんとわたしは、ランタン谷、ガネッシュ・ヒマール、マナスル3山を巡ってアンナプルナまでの旅。その途中でいい山を見つけて登りたかった。

ランタン谷で、秀麗なヒマラヤひだをまとった未踏のガンチェンポ(6387m)に魅せられた。難しいことは承知のうえでアタック。ビバークして11月25日、頂上から西に伸びる稜線には出られたが、先は遠かった。

20年近くが過ぎた1982年、ランタン谷を再訪し、ヤラ氷河でヒマラヤでは初めての氷底60m深に達する掘削に参加した。拠点キャンプは、ガンチェンポがよく見える所にあった。朝な夕な、その姿にみとれていた(写真2)。

1967年1月、鎖国状態のブータンの登山計画をやってみないかという話が、AACKから山岳部に回ってきた。卒論そっちのけで取り組む。英語とチベット語でまとめたブータン国王宛の最初の申請書は、同国最高峰・ガンケルブンツムの初登頂計画。だが計画は縮小せざるをえず、入国交渉のため、インドで半年ねばった。結局、小野寺幸之進・上田・市川光雄の山岳部隊は短期入国はできたが、パロ、ティンプー、プナカまでの訪問で終わった(文献4)。

交渉の合間に市川とネパールに行き、手頃な山に短期で登れるかもしれないと、ロールワリン谷に入った。そんな山を求めて主谷から分水嶺を南へ越えるのだが、峠の北西にある未踏らしい雪峰に引かれた。峠手前のキャンプに不調の市川を残し、シェルパのイラ・ツェリンと向かった。氷河を登り雪稜に出て、ワン・アット・ア・タイムのツルベで登頂。のちに発行された



写真3 ガンケルブンツム (1998. 10. 13)
ガンリンチェンゼ峠 (5200 m) より

地図では、ヤルン・リ(5630m)にあたる。その高さはイラ・ツェリンに、(彼がサウス・コルまで登った)エベレストならベースキャンプ程度だと言われた。1968年5月13日のことだった。その後も市川と、登れる山を求めた1週間は、スリリングな山旅となった。

それから30年が過ぎた1998年秋、ブータンで発生し大きな問題になっていた氷河湖決壊洪水について、同国と共同調査を始めることができた(文献5)。これは所管の通産大臣に言われたとおり、地球温暖化と氷河湖洪水が起らなかったら、実現することはなかった。調査はブータンにとって、かつて従属したインド以外の国との、初の共同事業となった。

日本側は岩田修二(都立大、六甲学院山岳部OB)、内藤望(名大D4、京大山岳部OB)らと5人で、人跡のない氷河を歩き、ガンケルブンツムを近くに望む峠を越えた(写真3)。若い頃の夢を別の形で実現でき、感慨は深かった。

2.2 ヤルン・カン初登頂

1973年5月、当時世界最高の未踏峰だったヤルン・カン(8505m)の初登頂(西堀栄三郎隊長)の機会にめぐまれた(文献6)。AACKの創立以来の悲願であった8千メートル峰初登頂への40年余りの流れと、それとは関係なく生まれ育ってきたわたしの歳月が、この山でつながったことはとても不思議な巡り合わせに思える。

5月14日、頂上アタックに際して、ガネッシュの時は山と向きあう純な高揚感があったが、ヤルン・カンではそこに、AACKの伝統と願望が入りこんでいた。「四時のコル」に出て、最後の高度差150mを登りながら、ヤルン・カン



写真4 ヤルン・カン頂上の松田さん (1973. 5. 14)

は、いま登れるぞ!と、日本にいる先輩や仲間に、今すぐに伝えたかった。

頂上への最後のアプローチも、ガネッシュとヤルン・カンでは対照的だった。ガネッシュでは、アンナプルナ内院のルートから主稜線に出たとたん、別世界のようなダウラギリとチベット

うに鈍く光り、頂上に続いていた。

ヤルン・カンでは、「四時のコル」に出た時、北の山々が一瞬のガスの晴れ間にチラッとのみただけ。だがそのあとが違った。ガネッシュでは、頂上で写真を撮りまくりながらも、その先に見えていた最高点が気になっていた。ヤルン・カンでは、「やった!」と叫んで頂上のやせた雪稜に馬のりになった。そこが登りの終了点だと、クリノコンパスで確かめた。

フィルムは、頂上にピッケルを立てた松田さんを撮った1枚で終わった(写真4)。小雪チラつく中で、新しいフィルムに交換する余裕はなかった。そのカメラは翌日、わたしが外したザックに入ったまま断崖を落下し、急な雪面にかろうじて停まった。救援隊がそれを回収できなかったら、登頂写真はもちろん、アタック途中の画像も残らなかった。

頂上からの下降では、様々なことが続いた。下り始めてから25時間後、彷徨のすえ救援隊の甲斐邦男・森本陸世・ニマノルブと合流。青白い月明りのもと、「すべり台」と呼ばれた長い急斜面を、左足のアイゼンを失ったまま無事に下降できた。そこには何か不思議な力が働いていたような気がする。救援隊のおかげでわたしだけが、消えることのない悔恨の思いとともに、辛うじてこの世に繋ぎとめられた。

ヤルン・カンでは登山の後にも、意外なこ



写真5 アンナプルナ初登頂40周年記念祭 シャモニ (1990. 6)

とが待っていた。遭難し凍傷になってから、1950年アンナプルナI峰初登頂のM. エルゾグ氏のことが帰路の頭に何度か浮かんでいた。その彼が、わたしがネパールを離れる時に偶然カトマンズに居て、同じ飛行機でニューデリーに向かっていた。これだけでも、ほぼゼロに近い確率の事だろう。そしてニューデリー空港のバスの中で、座っている彼の前に、たまたまわたしが立っていなければ、何も知らずに過ぎていただろう。

それから17年後の1990年6月、人類初の8千メートル峰・アンナプルナ登頂40周年を記念した式典がシャモニで開かれ、世界中の8千メートル峰初登頂者たちが招かれた。日本からは、マナスル初登頂の今西壽雄さん(AACK)、2次登頂の日下田実さん、エベレスト女性初登頂の田部井淳子さんと、わたしが招かれた。元気なエルゾグさんにも再会できた(写真5)。

ヤルン・カンの後、ネパールには1974～2004年に氷河調査等で10回ほど行った。名大を定年退職した2007年11-12月には、朝日新聞社の小型ジェット機による氷河縮小の空撮観測に加わった。夕暮れのカンチェンジュンガのフライトもあった。

ヤルン・カンにはカンチェンジュンガ山塊の西峰なので、夕陽をまともに浴びて残照が映える山だ。その夕陽に染まるヤルン・カンを、1万メートルの上空で、何度も周回する機内から鳥瞰できた。金色からピンクへと移りゆく姿をじっくりと見つめながら、カメラに収めた(写真6)。この巡り合わせに、天にも昇る気持だった。

シャモニでお会いした日下田さんがこの1月、89才で病没された。マナスルの隊員では最年少だった。アンナプルナ登頂40周年の式典から更に30年が過ぎた。その間にエルゾグさん、今西さん、田部井さんも他界されている。8千メートル峰初登頂時代の残照が消えかける時に間に合った76才のわたしだけが、いま残されている。そしてまた、わがヤルン・カン隊をみれば、その後47年を経て、15人のメンバーのうち既に9人を、残る6人が見送ってきた。

3. チベットでの初めて

広大な中国西部地域は長らく閉ざされてい



写真6 ヤルン・カンの夕景(2007.12.1)

たが、1980年頃その門戸が諸外国に開かれた。1981年夏、初の日中共同氷河調査が天山山脈で実現し、日本から渡辺興亜さん(名大、北大山の会)とわたしが参加した(文献7)。シルクロード沿いの魅力に満ちた地域で、日中双方の隊員たちが、初めて接する互いの調査器具、行動方法、生活習慣などを、新鮮な気持で経験し合っていた。

これを契機に両国の協力関係が、西崑崙山域での本格的な調査へと発展する。1985年に渡辺・中尾正義(AACK)両氏が予備調査し、対象のチョンス氷帽の行動には、スノーモービルが有効と判断した。この年わたしは、後述する南極26次隊で越冬していたが、帰国したら山口大から名大に移り本調査(樋口敬二隊長)にあたるよう、国内でレールが敷かれていた。

1987年夏の本調査では、日本から2台のスノーモービルを持込んだ。これらは中国の氷河で初めて、掘削器材等の物資や人員の輸送に、すばらしい威力を発揮した。

チョンス氷帽の頂上は未踏で、標高6530mだが中側は登頂には興味なし。中尾ら4人の日側隊員で8月26日、スノーモービル2台に分乗して前進キャンプを出る。高度差650mを1時間で登りきって登頂した。だがわたしには登ったという達成感に欠けた。頂上から180m低いコルまで戻り、一人で歩いて登りなおした(写真7)。崑崙山の山々とチベット高原のパノラマを、たっぷり味わえた1日だった。

1989年のチベット調査は、6月の天安門事件でいったん帰国し、渡航禁止が解けた9月に岩田らと再訪。ラサから東へ向かい、ギャラペ



写真7 西崑崙チونس氷帽の登り直した頂上
(1987. 8. 26)

りとナムチャバルワを望見できる峠を越え、気候湿潤なニエンチェンタングラ山脈東部に入った。森林帯まで流下するゼブ氷河を歩き、この地域最長 35km のカチン氷河の末端も訪れた。これまで調査してきたのとは異質な氷河を初めて経験し、視野が広がった。

西崑崙からの日中共同調査は募金と文部省科学研究費で続けてきたが、1991-93 年度は「チベット高原の水循環における雪氷の役割」のテーマで科研費だけでまかなった。この日中共同調査はチベット高原中央部・タングラ山域に重点を置き、気象・水文・雪氷の観測をした。これまでの中国での観測は、AACK 会員では樋口、中尾、幸島司郎、安成哲三、太田岳史、窪田順平、福嶋義宏の皆さんと一緒にだった。

1992 年 5 月には、タングラ山域のドンケマディ氷河脇の高度 5500m のキャンプを拠点に、わたしは藤田耕史（名大 M1、京大山岳部 OB）と氷河を調査した。5 月 11 日、観測作業のついでに、2 人で氷河左岸の稜線にある未踏らしい 5803m 峰に登った。最後はカリカリの氷だったが難なく登頂。晴天微風の頂上で、周りのパノラマを楽しんだ。

10 日間滞在したキャンプの撤収中、急に腹痛、おう吐に見まわれる。タングラ兵站到寄り軍医の応急治療を受け、4 日後、帰路のゴルモ市で人民病院に 2 日間入院。検査や点滴などでお世話になった。病因について、医師は疲労と見立て、隊員間では氷河キャンプでの毎晩の白酒にあるとの説もある。医師・看護師達はとても親切で、中国の貴重な一面を体験できた。

4. 南極での初めて

4.1 やまと山脈観測旅行

ブータン入国交渉でニューデリーに居た 1968 年 2 月、24 才の時に戻る。その 4 月から名大の大学院に入るわたしに、第 10 次南極越冬隊に参加しないかとの手紙が届き、望んでいた南極への道が開ける。市川とロールワリン、ブータンに入った後 6 月帰国。11 月末に、砕氷船「ふじ」で南極へ向かった。

翌年 2 月、昭和基地で 9 次隊・極点旅行チーム（村山雅美隊長）の帰還を迎えた。この旅行は定まったゴールを一直線で往復した大トラバースで、日本隊の内陸旅行の一つの時代が終わった。10 次隊からは、研究のために効果的な旅行ルートを設定し、より良いデータを蓄積するための年次計画を立てて観測旅行を行う。これは新たな時代の始まりだった（文献 8）。

観測の目玉は、白瀬氷河の海への流出口から約 250km 上流域の流動速度を求めること。11 月～1 月の内陸旅行（安藤久男隊長、北大山の会）で、流動方向と直交する東西 250km にわたって三角鎖の測量網を設置する。作業は高い精度を保ちながら、やまと山脈の不動の露岩につなげねばならない。測量は 40 日かけて無事達成できた。この三角鎖は 4 年後に再測量され、その間の移動量から流動速度が算出され、氷厚が減少していることも分かった。

やまと山脈の裸氷帯で 12 月 21 日、成瀬廉二さん（北大低温研、北大ワングル部 OB）は、見つけた石を、上流側に露岩が無いので、隕石かも？と拾い上げた。それを知って、なるほど、隕石に違いないと、わたしは思った。先頭車で八木実さん（学習院大山岳部 OB）とクレバス帯にルートをさがしながら走っていたので、裸氷に載る石はさらに見つかった。結局 9 日間で 9 個になった。やまと山脈では 4 次隊が地学調査をしていたが、隕石発見は 10 次隊が初めてだった（写真 8）。

この旅行では未知のヌナタークやモレーン・フィールドも見つけ、この時代の南極には、まだささやかな発見があると感じた。ところが、隕石については、年が経つにつれ、雪だるま式に成果がふくらんでいく。わたしたちが採取した石は「やまと隕石」と名付けて注目され、日本隊が山岳裸氷域で隕石を計画的に収集するようになって成果をあげた。それに刺激されたア



写真 8 南極やまと山脈 10 次旅行隊
と隕石 (1969. 12)

アメリカ隊も積極的に収集をつづけ、隕石の採取量が南極で急増していった。

2019年8月の時点で、世界中で見つかった隕石は6万2千個近く、うち南極で分類・公表を終えている隕石は3万8千個を越え、太陽系の歴史など惑星科学の研究に役立っている(国立極地研・山口亮准教授による)。1966年刊の隕石カタログ(British Museum)では、世界で約2000個、南極で4個しかなかった。ちょうど50年前になる偶然の発見が、隊の調査目的と異なる分野で大きく役立ち、人知を広げていくとは、当時は思いもよらなかった。

4.2 未踏の氷床ドームへ

1984-86年の第26次南極観測隊では、「初めて」につながる2つの熱く高揚する行動ができた。そのいずれもが、日本を出る時には予定に無かったという、異例の成りゆきから生まれた(文献9)。

隊が南極へ向かって航海している時、前次隊の内陸旅行チームは、南極で2番目に高い未踏の氷床ドームの頂上探査のために前進していた。だが、みずほ基地の隊員が重傷を負ったため旅行チームの医師が必要になり、チームは途中で引き返す。そこで、わたしたちがその任務を引き継ぐことになったのだ。運命の不思議な巡り合わせを、心底から感じた。

もう一つ、26次内陸隊は冬を越してから氷床高原部を調査した後、往路と同じルートで昭和基地側へ帰投する計画だった。それを変更して帰路に隊を2分し、1隊を昭和基地の西南西650kmのあすか基地へ向ければ、新しい内陸

ルートを開拓できる。その発案は、最初の夏にあすか基地の新設作業にあたった際、その背後に広がるセール・ロンダーネ山脈に魅せられたことから生まれた。計画変更は文部省南極本部の許可を要し月日がかかったが、国内関係者の尽力で実現した。

この越冬でわたしは、昭和基地は1泊だけで、13ヵ月を内陸雪原での行動に徹した。昭和基地から南東270kmのみずほ基地(高さ2230m)を出て、2月にその南西500kmの地点に前進拠点(高さ3200m)を建設。みずほ基地の設置以来15年ぶりの内陸拠点となった。

冬は、雪面下に埋もれたみずほ基地で5人で越す。その間、日本隊としてこれまでの最低気温となる、 -61.9°C を記録した。10月に前進拠点を再訪し、11月6日に日本隊では内陸高原で初めて深さ200mを越える掘削に成功。同9日、未知の氷床ドーム探査に奥平文雄・神山孝吉・藤井純一・野村武志とともに向かった。

隊内で「ふじドーム」と呼んだ頂上の場所・高さなどは、まだよく分かっていなかった。それらを求めることは地図作成に必須だが、他の科学的な意味も大きい。氷床氷の流動方向や流域境界を知るためには、氷の分水界が頂上から枝分かれするので、頂上の位置をおさえる必要がある。またその頂点では、脇から流入する氷が無いので、直下の雪氷は全てその場で堆積した物だ。それを掘削・採取すれば、古環境復元の最良の試料となる。

11月22日、前進拠点から300km南下した高度3760m地点に達し、ドーム・キャンプ(DC)とした。DCから真東に100km直進し、そのルー



写真9 氷床ドーム頂上を後に (1985. 11. 28)

ト上で最も高かった地点に戻る。そこから精密な経緯儀で周囲360度の地平線の高度角(仰角・伏角)を測量し、最も高い方向を求める。その方向へ6km進み、また同じ作業を繰り返して6kmずつ進んだ。そうして11月28日、人工衛星による位置決定装置が高度3807mを示した地点を、氷床ドームの頂上と定めた。山岳地を除く南極氷床上で、ここは日本隊が到達した最高地点になる。

DCから頂上までの直線距離は約130km。その間の高度差は、50mもなかった。頂上に近づく程、その勾配は限りなくゼロにせまる。そんな所で角度10秒ほどの微妙な精度が求められる測量作業ができるかどうか、不安だった。目的は、ゴールに到達することで達成されたのではなく、到達後そこを離れた地点から確認の測量をして決着した。その瞬間、経緯儀の望遠鏡で目を凝らしていたわたしは、望遠鏡に目を付けたまま思い切り万歳していた。不安から安堵に転じた喜びだった。

海原のような雪原で、かげろうの立つ地平線を経緯儀の望遠鏡で見つめる日々。探検時代の極点到達なら、人跡未踏であってもゴールは既定の位置にあり、ただ真南へ直進するのみ。そうではなく、位置・高さが未知のゴールを探りたどっていく興奮がここにはあった。地理上の探検はとっくに終わったとされた時代に、素晴らしい体験をさせてもらった(写真9)。

4.3 セール・ロンダーネ山脈へ

前進拠点に戻り年が明け、昭和基地側へ向かう隊を送り出す。1月8日、吉田治郎・藤井・神山(京大探検部OB)と雪上車2台で、北西



写真10 ブラットニーパネ峰の遠望
セール・ロンダーネ山脈 (1986. 1. 25)

500km程のあすか基地へ向かった。あすか基地と内陸をつなぐルートを開くための旅行だが、その途上でセール・ロンダーネ山脈の未踏峰に登ろうと、みずほ基地で冬から企てていた。イギリスのスコット極地研究所発行の地図で、予定ルートの近くに標高3630mの孤立峰ベルテルカカを見つけていたのだ。もしかして、山脈の最高峰かもしれない。

16日、雪の地平線に岩の突起を遠望する。雪以外の風景は10ヵ月ぶりだった。20日、めざすベルテルカカ峰に向かう。本来の任務があるので、雪上車は旅行ルート上に温存し、日帰りという制約をつけた。目標まで25km。だが、4人が分乗したスノーモービル2台では、思ったほど頂上に近づけない。頂上の標高は地図よりかなり低いようだが、そのさき歩いて登るには時間不足は明らかだった。残念だが、後日なんとか別の目標を見つけたいと思った。

山岳裸氷帯の複雑なルートを抜け、バード氷河のクレバス帯も横断できた。1月26日、1年前に新設したあすか基地に無事ゴールイン。この1年間、わたしの雪上車による走行距離は4千km程になった。そのうち未踏だったルートは、1400kmくらいか。

ベルテルカカに代わる山は、間近にあった。バード氷河を横断しながら眺めていたブラットニーパネだ(写真10)。その懐にある氷河へ、あすか基地(高さ930m)から1週間の調査に行った。天気都合で、登山は調査の最終日2月7日にずれこんだ。

登山経験の豊富な藤井・神山と、キャンプ(高さ1010m)からスノーモービル2台で、調査した氷河を登った。300m近く高度をかせい

で停め、アイゼンを付ける。西面に取りつき、最後は急な雪の北斜面をトラバース気味に登り切った。頂上に誰かが登ってきた形跡はない。高度計で測ったあすか基地からの高度差によると、山頂高度は2470mになる。

曇り空から時々日がさすようになっていた。周りにはセール・ロンダーネの山々が広がっている。あすか基地を目ざして走ってきたルートも見える。この日は、1年を越えて続いた内陸行動の最後の区切りの日でもあった。ベルテルカカ登頂の失敗とこの1週間の天候の巡り合わせが、この日この頂に幸せなピリオドを運んでくれた。

4.4 その後のドームふじ

「ふじドーム」という名前はわたしが提案し、隊内ではそう呼んだ。だが帰国後、南極の公式の地名を検討する国内委員会では、認められなかった。すでにスコット極地研究所の地図の該当地域に、Valkyrjedomen という地名が記されていたからだ。しかし、雪氷研究仲間が Dome F や Dome Fuji の呼称を使い、その後ここにできた基地の名称にもなって、国際的にそれが定着した。Valkyrjedomen はこの付近一帯の名称であり、その頂上が Dome Fuji なのだという見方もできる。

26次隊から10年後のこと、35次隊（横山宏太郎越冬隊長、AACK）によって新設されたドームふじ基地で、36次隊の越冬が始まる。これは極地観測史上、最高所での初めての越冬になる。1995年1月、基地設備・生活環境などの越冬態勢が整っていることを確認するため、わたしは夏隊で現地を再訪する機会を得た。かつてドームを後にする時、このような状況になろうとは、予想だにしていなかった。

1月17日、通信が阪神淡路大震災の報を伝える。同29日、初越冬に入ることを確認式をして、東信彦基地長（長岡技科大・現学長、北大山の会）ら9人を残して帰路についた（文献10）。そうして、氷頂から氷底をめざす深層掘削プロジェクトが始まった。

その第I期では、1996年12月、2503 m 深に達し34万年前まで、第II期では2007年1月、ほぼ氷底に達する3035m 深で72万年前までの古環境復元試料を採取できた。現在は、地球上最古の100万年以上前の氷がある場所をドーム

ふじ近辺で選定し掘削するため、第III期計画が始まっている。

1995年1月末に戻る。初越冬隊をドームふじに残しての帰路は、古参の雪上車 SM506 号を人数不足でわたし一人で受持ち、千キロの行程を10日間寝泊り運転して帰った。帰国後、南極の仕事から離れ、ブータンやネパールの調査で5年近く経った頃、ある新聞記事が目にとまった。地元・名古屋港の「ふじ」の前に、雪上車が展示されるという。付いていた小さい写真を見ると、車体に「506」の文字。南極最後の旅を共にした懐かしい雪上車ではないか！

SM506号車に再会し、更に20年が過ぎた今でも、名古屋港の岸壁には、わたしが初めて南極へ向かった船と、最後に南極の雪にトレースを残してきた雪上車が置かれている。25才の時と51才の時を象徴するものが、4半世紀の幅を置いて並んでいる風景を、目の前に見ることができるのだ。こんな巡り合わせもあるのかと、不思議な思いがする。

5. 振り返ってみて

ここまでわたしが振り返ってきたことは、色々な巡り合わせの上で成り立っていたように思う。そこには、偶然や幸運のうえに、奇跡も重なっていたようだ。わたしの生きてきた時代がちょうど、その時々で望みをかなえるように変わってくれたことも大きい。また、周りの方々の力があってこそそのことだった。

そのようにして、ずいぶん恵まれた経験をさせてもらえたと思う。だが、これらのことが人の世にとっては何だったのか、という思いは今も残したままだ。

文献

- 1) ヤルン・カン後、わたしの40年. 上田豊, 2013年, AACK ニュースレター 65-66 合併号, 8-11
- 2) ガネッシュからヤルン・カンまで、わたしの二十代. 上田豊, 2014年, AACK ニュースレター 71号, 8-12
- 3) ガネッシュの蒼い氷. 吉野熙道・上田豊・木村雅昭・島田喜代男, 1966年, 朝日新聞社, 251頁
- 4) 遠征報告—1967年度京都大学ブータンヒマラヤ遠征隊. 上田豊・市川光雄, 1970年, 報告15号, 9-45

- 5) ブータン氷河湖決壊洪水調査記. 上田豊, 1999年, AACK ニュースレター 14号, 1-5
- 6) 残照のヤルン・カン. 上田豊, 1979, 91年, 中央公論社, 269, 312頁
- 7) 中国1980年代を思い起したミニヤ・コンガにいたる旅. 上田豊, 2017年, AACK ニュースレター 83号, 5-11
- 8) 南極雑感—南極観測隊と探検. 上田豊, 1972年, AACK 時報7号, 61-65
- 9) 未踏の南極ドームを探る. 上田豊, 2012年, 成山堂書店, 237頁
- 10) 南極「ドームふじ」と名古屋港. 上田豊, 2016年, AACK ニュースレター 79号, 13-15

2020年度総会について

京都大学学士山岳会会長 幸島司郎

京都大学学士山岳会の2020年度総会は、新型コロナウイルス対応のため変則的な開催となりました。

今般の新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、数多くの集会やイベントが中止・延期・変則的な開催を余儀なくされております。本会におきましても、5月23日（土）に開催された今年度の総会は、感染のリスクを避けるため、当日出席者は京都在住の役員など、ごく少人数にとどめ、他の会員の皆さまには、書面でのご

審議とご意見の表明、および委任状送付による議決権の行使（定款20条）をお願いする形で開催いたしました。同日に開催予定であった笹ヶ峰会の総会も同様の開催方式で、6月13日に延期して行われることになりました。また、報告会・懇親会等は開催しませんでした。

会員交流の貴重な機会である報告会・懇親会等は、新型コロナウイルスの状況を見ながら、可能であれば改めて企画し、ご連絡いたします。

会員動向

訃報

宇野 佐 2020年1月14日逝去
 笹谷哲也 2020年4月21日逝去

会員異動

平野桂介 自宅住所変更
 藤竿和彦 自宅住所変更
 山地崇博 自宅住所変更

編集後記

新型コロナ禍のなか、皆様いかがお過ごしでしょうか。立場上ご苦労されている方も多いのではと心配しております。私は会議・会合が中止やリモート開催になり、移動・接触の少ない生活です。今年度の総会は大きな影響を受けましたが、Newsletterは通常通り発行の予定です。ご寄稿をよろしく願います。

横山宏太郎

次号原稿締め切り 2020年7月16日

原稿送り先：横山宏太郎

発行日 2020年5月25日
 発行者 京都大学学士山岳会 会長 幸島司郎
 発行所 〒606-8501
 京都市左京区吉田本町(総合研究2号館4階)
 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
 研究科 竹田晋也 気付
 編集人 横山宏太郎
 製作 京都市北区小山西花池町1-8
 (株)土倉事務所